

健康

質問

医師から「治療効果より副作用の方が強くなってきているので、抗がん剤治療を続けるかどうかが、決めてくるようだ」と言われました。治ると思つて頑張ってきたのに、これからはどうしたらよいか不安でたまりません。

薬剤治療の続否迫られた



杉原 治美  
徳島大学病院地域医療連携センター看護師長

回答

抗がん治療の進歩によって、より延命・治療効果があるとされる薬剤に変更しながら化学療法を受け続ける人が増えています。ご質問のような悩みは、多くの方が抱えています。医療者の間でも「化学療法終了の適切な提案はどのように行うべきか」と議論されています。

薬剤による治療効果がある、患者の方は延命ではなく、完全治癒に期待と希望を持つ反面、いつか「これ以上の治療はありませぬ」と言われるのではないかとどう不安を抱くことがあるかもしれません。あるいは「治療はいつまで続へるのだろうか」と考

自らの死生観で選択を



えていた方もあるかもしれませんが、いずれにしても、想定外や突然の告知を受けて、直ちに意思決定するのは難しいことです。

以前から、緩和ケアは「終末期からではなく、がんと診断された時から始まっている」とされていまし、人間は「おきあ」と生まれの瞬間から、いつか死ぬ運命です。しかし、われわれは、どう生きてどう死ぬかを考える「死生観」を学ぶ機会がほとんどないまま、医師が決めてくれるのではなく自己決定で治療や療養方法を選択する必要があります。必要と迫られるのが現状です。

いつかは訪れる死を「望ましい死」として迎えるため、冷静に判断できる時に「自分にとって何が一番大切か。人生にとって何が重要か」を考えておく必要があります。日本人の8割以上が望むのは「身体的・心理的な苦痛がないこと」「望んだ場所で過ごすこと」「他者の負担にならないこと」とされています。こうした事柄については医療従事者だけでなく、どうにもならないこともあり、どうしてあげればよいのか苦慮している現実があります。国の在宅医療推進の方針を受け、患者の方が自分で判断できなくなった時に備えてくれる人たちが「一緒に医療への希望を用意し、考えて意思決定することを」お勧めします。

「本人意思決定を尊重した」(第4土曜掲載)の題名にもあるように「がんはらなけれど、あきらめを受け、患者の方が自分でない」と、希望を胸に、支えてくれる人たちと一緒に医療への希望を用意し、考えて意思決定することを「事前指示書」やお勧めします。

支援者と意思決めよう

質問募集  
がんに関する質問は、徳島がん対策センター(電話0888)6033(044000)(平日午前8時半~午後5時)に寄せください。http://www.toku-gan.jp/aisaku.jp/でも受け付けます。

地域連携」が注目されています。また任された地域で過ごすため、医療・介護にまつがるさまざまな支援の必要性が検討されています。

今まで病気をしたことがなく、かかりつけ医を持たない人に対しては、往診医を紹介してくれる在宅療養支援事業も始まっています。口腔ケアや栄養管理で、抗がん剤治療が続けられることもありますし、在宅医による痛みの緩和、訪問看護・リハビリなど、生活を支える医療や介護もあり、医師・鎌田貴さんの著書の題名にもあるように「がんはらなけれど、あきらめを受け、患者の方が自分でない」と、希望を胸に、支えてくれる人たちが一緒に医療への希望を用意し、考えて意思決定することを「事前指示書」やお勧めします。